

第34回 福島県建築文化賞 総評

福島県建築文化賞は、東日本大震災による2年間の中断を挟み、本年度で34回目を迎えた。

今回の応募作品は62点で、うち公共建築物が35点、民間建築物が27点であった。用途別では、福祉・医療施設等が14点と最も多く、次いで庁舎・事務所等10点、学校教育施設、文化・スポーツ施設が各9点、共同住宅が8点、工場等、複合施設、建築物群又は建築物等が各3点、商業施設等が2点、古い建築物の修復が1点であった。地域別では、浜通り14点、中通り31点、会津17点となっている。公共建築物が過半数を占める一方、民間の福祉・医療施設や東日本大震災からの復興を目指す災害公営住宅が多かったことが特色としてあげられる。

一次審査は8月17日に、書面により現地審査対象作品の選考を公開で行った。始めに賞の趣旨、意義を再確認した後、各審査委員が会場に用意された応募書類、図面、写真をもとに評価を行った。審議においては、全員が全体的な評価や感想を述べた上、各委員11点以内で候補作品を投票した。その結果をもとに、多くの票を集めた作品、及び少数であっても評価すべき点について明確な理由と共に推薦のあった作品を対象に議論を重ねた。その結果、現地審査対象とする16点を全会一致で選定した。

二次審査は10月23日から25日まで3日間にわたり、一次審査で選定された16点について現地審査を実施した。各審査委員は、周辺環境との調和、建築物のデザイン・機能性、東日本大震災からの復興に対する貢献など、賞の基準に照らして多角的な視点から評価を行い、正賞、準賞、優秀賞候補として5点、特別部門賞候補として3点、復興賞候補として3点を選んで投票し、その評価理由と全作品についてのコメントと共に提出した。

最終審査は11月13日に全審査委員出席のもとで行われた。全員が現地視察を通じた印象と評価の観点について述べた後、授賞作品の選考に移り、事前の投票の集計結果と各審査委員による推薦作品の評価理由をもとに意見交換を行った。

評価が拮抗して、困難な選考となったが、最終的に合議により全会一致で下記のとおり、正賞1点、準賞1点、優秀賞3点、特別部門賞3点、復興賞3点が選定された。

以下に各賞の選定理由を示す。詳しくは受賞作品ごとの講評を参照されたい。

正賞の『あぶくま更生園』は、知的障がいを持つ人々の生活実態について理解した上で、様々な空間要素を組み合わせ、短工期の中で地場産材を巧みに用いて、明るく変化のある空間が実現されている。居室をユニット配置して施設的な雰囲気をなくすと共に、視覚的な一体感をもたせ、従来の障がい者施設のイメージを払拭した建築となっている。

準賞の『宮畑遺跡史跡公園 体験学習施設（じょいもん）』は、公園と建物を一体にとらえ、遠望する吾妻連峰まで取り込んだ配置により、太古に思いを馳せる場が生み出されている。エントランスホールの縄文土器をモチーフとした逆六角錐の繰り返しによる木造立体トラスの屋根架構が印象的で、難度の高い設計に施工者も応え、密度の濃い建築が実現されている。

優秀賞には、『国見町庁舎』、『北会津こどもの村幼保園』、『BLUE MUG COFFEE』の3点
が選ばれた。

『国見町庁舎』は、鉄骨と集成材のハイブリッド部材により、庁舎に求められる大スパン
の空間と利用者に優しい木の空間が両立しており、コンパクトな平面形でありながら豊かさ
が感じられる。外部の木のルーバーとボックス型バルコニーが新しい景観を生み出し、来庁
者を迎え入れている。

『北会津こどもの村幼保園』は、周囲の風景を取り込み、遊びや交流の場となる円形の屋
内広場を囲んで、家型の色とりどりの屋根をもつ保育室が配置され、木を生かした内部空間
と幼保園を構成する個々のスペースについてのアイデアにより、文字通り子供の世界を創り
上げている。

『BLUE MUG COFFEE』は、前面道路のカーブに面して雑木林を設け、印象的な建物の形態と
相まって、街並みに対するアクセントとなっている。緑に面したテラスと、木や石等の素材
を生かし手作り感にあふれた居心地よい内部空間が、豊かな時間を過ごせる場を地域に提供
すると同時に、建て主の建築にかけた夢を実現している。

特別部門賞には、『曙ブレーキ福島製造株式会社 桃苑寮』、『喜多方市立熊倉小学校体育
館』、『福島県買取型復興公営住宅 関船団地』の3点選ばれた。

『曙ブレーキ福島製造株式会社 桃苑寮』は、女性たちが学びながら働き、共に過ごす場
として、女性による計画・設計・施工チームで検討が重ねられ、間仕切りを閉じれば講義室
となるホールや吹き抜け階段ホールを中心に、明るく一体感のある寮生活空間が生み出され
ている。

『喜多方市立熊倉小学校』は、地場産の8寸角の杉材200本を製材として用い、木造な
らではの架構の繰り返しにより、内外ともリズム感のある空間・形態が、工期・工費等の厳
しい条件のもと、地域の製材所・大工の力を集めて実現されている。

『福島県買取型復興公営住宅 関船団地』は、コスト・工期が厳しい買取型復興公営住宅
の設計・建設において、県産材を使用し、地域の製材・建設能力を生かすことにより、
WOOD.ALCによる県内初の木表し3階建て公営住宅を、4か月という超短工期で完成させ、
公営住宅計画の新たな可能性を示している。

復興賞には、『飯舘村災害公営住宅飯野町団地』、『KIK 'B』、『矢吹町営 中町第一災害公
営住宅』の3点選ばれた。

『飯舘村災害公営住宅飯野町団地』は、将来ビジョンをもとに子育て世帯を主対象とした
災害公営住宅である。戸建てと長屋形式の住戸が広場を囲む配置とその中央に設けた集会施
設が居住者同士、周辺住民との交流を可能にしている。集会施設が子供の居場所として木造
で居心地よく計画されていることも特筆できる。

『KIK 'B』は、被災により活気を失っていた郡山駅前大通りを活性化するために、1階は

レンガタイル、2階は木製ルーバーのファサードによる連続的な街並みを新たに創り出している。店舗群の中に賑わいや活動を生み出すスペースを確保し、まちづくりの核となる一面を実現している。

『矢吹町営 中町第一災害公営住宅』は、とおり庭やリビングアクセスにより交流を生み出す配置、木材を活用して多様な住戸平面の組み合わせや変化のある立面構成等、挑戦的な姿勢で新たな公営住宅の可能性を示している。被災して歯抜けになった旧奥州街道沿いの街並み再生の起点となることが期待される計画である。

惜しくも選外となった作品にも、本賞の趣旨に照らしてそれぞれ見どころがあった。

『王子コンテナ株式会社 福島工場』は、工場のイメージを破り、大きなガラス面で開放的な姿を前面の植栽と合わせ、地域に対する顔を創り出している。

『郡山市立中央公民館・郡山市勤労青少年ホーム』は、隣接する郡山公会堂のファサードの意匠をホワイトの壁装に生かし、夜にはそれが木質空間の暖かい光の中に浮かび上がって街の魅力を高めている。

『ふくしま逢瀬ワイナリー』は、企業の復興支援によるワインの醸造施設に展示・集会機能が組み合わせられ、端正な建築デザインと前庭と周囲の緑が調和した、人の集まる場を生み出している。

『希望ヶ丘プロジェクト』は、建築家の協働により、中庭を囲んで様々な木構造の仮設建築が計画され、コミュニティ再生や応急仮設住宅の部材の再利用など、多様な提案がなされている。

『坂下南幼稚園』は、構造材、床材、壁材、天井材に県産木材を採用し、平面的な広がりと同程度のスケール感を持つ、木造ならではの居心地よい子供の空間となっている。

応募作品は、いずれも建築主、設計者、施工者の建築文化に対する理解と姿勢があって生み出されている。それぞれの地域の建築文化の発展に寄与すると共に、こうした積み重ねにより福島県全体の建築文化が形作られていくことが期待される。

現地審査では、構想や計画、施工段階に携わった担当者から、当時を振り返りながら、想いを込めて説明していただいた。例年、審査を通じて建築文化賞のあり方、賞を通じて建築文化として何を継承していくかということを考えさせられる。建築に携わった人々や地域の人たちの思いと努力の上に、建築が生まれ、技術が継承される。まちの景観が育ち、歴史が重なり、そうして建築文化が形成されていく。そのことが受賞作品を通じて多くの人々に共有されることを願っている。

最後に、今回応募いただいた関係者に対して、審査委員一同、深く敬意と謝意を表したい。

審査委員長 長澤 悟